

橘孝三郎と愛郷会・愛郷塾の農民教育

福 井 直 秀

The Education of Farmers in Tachibana Kozaburo and the Aikyokai-Aikyojuku

FUKUI Naohide

大正半ばの米騒動（1918年—大正7年）以後から、1930年代にかけての農民教育は、精神主義の時代として語られる。そしてこれは、「やせがまん」「安上がり解決」論¹⁾といわれたり、加藤完治の国民高等学校の教育方針から、＜行＞的とされたりする。だがこれらは、皆農政官僚に密接なつながりをもつ側からの提唱である。

時代の教育思想というとき、それは、政策として意図されたものと同義語ではない。何がしかの教育への期待をもった、或いは自己教育の欲求をもった思想との関係で語られねばならない。大正から昭和初期にかけては、民間の団体も教育を志向した例が多い。本稿では、塾風教育機関として挙げられながら、運動体としても働いていた愛郷会・愛郷塾²⁾を扱い、彼らの農民教育の思想を中心にみていく。

1. 橘孝三郎の農業経済論

後に愛郷塾首として5・15事件に参加することで知られる橘孝三郎は、1893年（明治26年）水戸の紺屋に生まれ、水戸中をへて1912年（大正元年）一高に入学する。一高時代は、哲学青年として『一高校友会雑誌』の中心的な寄稿者となるが、卒業を少し前にして中退し、水戸へ帰ってしまう。

一高時代の橘は、「一人の自覚した人間として、青年として」³⁾「一人の道求者としてのアクティフィスト」⁴⁾として、特に自らに一高生としての文明創造の役割を認めて生きようとしていた。が、注意すべきは、橘の求める文明とは、「同類意識的精神性」の上に作られるべきだということである。

「日本が精神文明をかか（plasticity をもつ——引用者）国民性の上に立つるにはどうしても同類意識的精神性の充分発達したる人格を有する個人を基礎とせねばならない、政治家も、学者も教育家も農、商、工業者も皆なかかる人格者で満される日が来なくてはならない。又社会各般の作用もかかる人格者を生む事を任務とせねばならない。（中略）要は精神文明に必要な民主的精神、自由平等の精神等が必要であるのである。而して何より同類意識的精神性が凡ての根本をなす事が必要なのである。」⁵⁾

そして、その具体的表現としては、「愛と誠」を希求する。

「諸兄よ、私等は愛を通して地上に共に与に生きんければならん。誠を通して固く堅く結び付かんければならん。すべてが愛と誠を通して、そして愛と誠を通して……………」⁶⁾

いささか食傷させられる感傷だが、これは、後の兄弟村——愛郷会の一基調となっていくので

ある。

病昂じた(?)橋は、「百姓生活と言ふものを自覚して営んで居る」「トルストイや、カーペンターや、ミレーや徳富蘆花」⁷⁾に憧れて、都会にないそれらを求めて、農村へ帰る。

橋はその年(1915年—大正4年)から農業をはじめ、翌16年結婚、17年親友の林正三(水戸中の同窓生で東京美術学校出)が橋の農場経営に参加、18年林は橋の妹と結婚、橋の次兄徳次郎も参加、という形で26年(昭和元年)までの間に、橋の二人の兄・鉄太郎、徳次郎、妹・早子(東京音楽学校出)、それに林正三、弟の正五(正五の妻も橋の妹)が揃って、農場を共同経営する。このインテリ集団は、兄弟村農場と呼ばれ注目されるようになる。

橋は農耕のあいまいに、農村疲弊の原因について研究しはじめる。橋の周りには、農村青年が集まりだし、また、県内で農会等の講演に招かれるようになる。ここで、橋の説く農村疲弊の原因、及び救済策を概観せねばならない⁸⁾。橋は、農村疲弊の原因を説く従来の学説に反論し、それをまずマルサス主義批判から始める。マルサス主義は、人口増に比して食糧増は少ないので、海外へ植民を求める以外にないとする⁹⁾。橋はこの機械論を認めず、食糧不足に対しては、国内での開墾可能地を挙げ、それで補えるとする。

橋が最も批判せねばならない対象としたのが、マルクス主義である。確かに、地主—小作関係は、問題となっていて、それ故に、マルクス主義は、当時農村でも、ある程度影響力をもっていたからである。これに対して橋は他の農本主義者たちと同様、都会対農村という対立図式で説く。橋は資本主義を賃労働—資本の関係としてではなく、営利追求たる工業生産の形態(それを行う資本)、そしてそれに伴う商業資本として理解する。だから橋においては、農業の利益を都会にもっていかれないために農業主導型の国民経済を追求すること、及び協同購入、販売によって、工業、商業に対抗する力をつけること、ひいては農業経営形態をアウトルキーに近づけることが、経済政策として志向される。「農業立国」と「農村の経済的自立」である。

国民経済論として橋は、産業の柱を米と生糸にしるという。これはいかにもアナクロニズムである。しかし、橋がこう主張する理由の方は存する。日本農業再建のモデルとして、大正の初めから、デンマークの例が提唱されている。そこデンマークでは、農民教育を発達させ、自作農化と農業の協同組合運動をすすめ、それにより、農業立国を完成させているといわれている(後述)。橋にとっては、デンマークの成功の原因は、単なる教育の普及や、協同組合運動に止まらず、国民経済を農民が指導しているということであり、また文明に与える経済の重要性を知る故によけいに、こう言わざるをえないのである。しかし、農業立国云々という話は、すぐれて政治的であり、わが橋は、ここではそれ以上追求しようとはしなかったのである。

後者の農業経営改善策として橋が説くのは、まず、農産物の販売、農具、肥料の購入を、協同組合運動によりすすめ、工業、商業の農村支配に抗すること、そして、肥料の自家生産の意味もかねての酪農導入である。

以上のような橋の農業経済論が、愛郷会の柱となっていくのである。

2. 愛郷会

(1) 兄弟村

橋の活動は、まず兄弟村の共同生活、そして愛郷会の結成、愛郷塾経営となる。ここでは兄弟

村の生活を考察の対象とする。

橘がほとんど一人で農耕生活を始めた当初は、人に倍する労働をしなければ成り立っていかない状態が続いたが、兄弟たちの参加により、商品生産もとり入れて経済的基盤を作っていく。そして、昼は農耕に従事し、夜は芸術や学問などをして過ごすインテリ集団が、形成されていくのである。まさにかつて橘が憧れた「トルストイや、カーペンターや、ミレーや徳富蘆花」の生活である。

杉浦孝が後にいうように、彼らは、信仰的に過ごしていたが¹⁰⁾、決して「隠遁生活」(杉浦説)ではなかった。ささやかではあるが、運動志向性をもっていたのである。橘は「婦人の国」(大正14年7月号)のインタビューに答えて次のようにいう。

「よし私の企ては失敗に終わっても決して私の考へ方が間違っているとはいけません。やがて多くの芽を出すために地に落ちた、一粒の麦だけの働きはなし得ると信じます」¹¹⁾

ではこの麦は、どんな胚芽をもっていたのか。まず農業経営の新しさである。そこでは、穀物の他に果樹、草花、酪農がとり入れられた。もちろん、従来の農業経営の構造を変える試みである。次に、芸術の重視にあらわされる農村文明の創出志向である。

「孝三郎氏の妹さんは音楽学校の卒業でピアノに達してをり、正三氏は前にいったやうに絵が専門だし、夜毎に幾時間かをさく談話室での集ひには、時ならぬ芸術論に花も咲くといふ」¹²⁾

そして、新しい共同性の追求である。だがこれは、成功裡に進まなかった。橘は次のようにいっている。

「十年の間には多少の感情の離反もなくはありませんでしたが、まあ無事に成長してこられたことを、非常に有難いと思つてゐます。ただ婦人達の間には、ほんたうに無我の共産的な気持が、頭では享け入れてくれても事実におつかると、やれ私の方の道具を使ってゐられて困ったとか何とかいふ風に、充分にのみ込まれてゐないのを残念に思ひます」¹³⁾

道具の共有という位で行き詰ってしまっていたのである。橘の総括のように思想的に共通なものが形成されていなかったといえよう。

以上ともかく、この兄弟村は、武者小路の新しき村と似ている。当時の人たちもそういつている¹⁴⁾。だが、一つ決定的な相違がある。武者小路の場合は、農業労働を、食べるために仕方のないものとし、芸術活動こそを主眼としている¹⁵⁾。橘の方は、農業生活にこそ意義があり、それが文明を(或いは芸術を)生み出すとしているのである。

先の引用は、兄弟村の初期の意気込み(まさに新しい村作りだった)が実践の中でくだかれていったことを、しかし、自分たちの試みが新しい共同体創設の先駆けとなることを期待していたことを示している。兄弟村といえども、ささやかな運動志向性をもっていたのである。

(2) 愛郷会

兄弟村の農業問題研究家・橘孝三郎が注目されはじめた1927年(昭和2年)、彼は茨城県農会農政調査会の委員を委嘱される。この頃から橘の講演活動がはじまるのである。そしてその後、小学校教員の後藤信彦と相知り、後藤が橘を中心とする農民組織の結成に向けて奔走する。そうして1929年11月できたのが、愛郷会である。

愛郷会の組織形態の特徴は、支部を活動の中心とすることにある。橘に接して感銘を受けた青年たち¹⁶⁾が、自分の周りの青年を集めて愛郷会支部を結成する。各支部をつなぐのは、理念的に

は「愛郷精神」であり、実体的には、橘の巡回講演と月一回程の幹部講習会である。

では愛郷会の理念（「愛郷精神」）とは何か。会ではそれを「兄弟主義を以て心から働かねばならん」¹⁷⁾ といっている。不明確ないい方だが、農民どおし共同してことにあたり、疲弊せる農村の現実に対処していこうという趣旨だといえる。

愛郷会は後に切迫感を抱き、政治運動志向へと変質するが、初期は、組織目標がそう明確ではなかった。現状を問題視している青年たちが、橘の説く「愛郷精神」に共鳴して愛郷会支部を作り、青年の組織化を目ざしたものだ。その「愛郷精神」とは、郷土（農村）を愛するという位の広汎な意味でうけとられ、従って活動内容も多様であった。各支部は、資金のための共同耕作田をもち、農村が資本主義によって破壊されていく歴史、理由を知ろうとし、肥料等の協同購入により、商業への隷属を断とうとした。なかには、文学青年の集まりがそのまま支部を作って農民文学を創造しようとしたり、青年団幹部の支部結成により、青年団そのものの愛郷会化が実現し、旧来の事業である奉仕活動などを行うところもあった。

愛郷会は、自身の運動内容を次の6つにまとめている¹⁸⁾。

1. 農村啓蒙運動……手段としては、本部、支部の定期集会、共働運動、機関雑誌「農村研究」の発刊、講習会
2. 農村純粹経済組合運動……生産者組合及び消費者組合である。
3. 農村教育革命運動……愛郷塾（後の話）
4. 農村共済組合運動……農村実費診療所等。
5. 合理的農業経営研究所……個人経営と組合化経営の二方面から
6. 理想的部落建設運動……搾取なき階級なきところの兄弟主義、勤労主義的共同的調和農村社会の建説⁽¹⁹⁾の実現を期する。

2. 4. 5. は農村の経済的基盤を確立しようとするものだし、1. 3. は教育・啓蒙活動だし、6. はこれらを通して理想郷を作ろうとするものである。6. の中には、都市文明でなく、農村文明を創造しようとの運動も含まれる。

これらの3つの運動の思想的及び運動的内容を探っていく。まず、農村の経済的基盤の確立はどう考えられたか。当初の愛郷会は、農業経営の合理化という点をかなり重視していた。都会の工業資本や商人たちに暴利を占められないよう、一つには、できるだけ金肥を買わなくてすむように農業構造の改変（酪農をとれ入れること＝愛郷農法）、もう一つは、協同購入、協同販売による中間利潤の排除である。この2つの方策には、かなりの比重がおかれている。農村の経済的自立と、それによる経済的安定性という意味はもちろんであるが、特に後者は、共同してこの運動にあたることにより、農民の意識の改変をもたらし、農村の自立が更に進められるという意味においてである。

兄弟村時代、共産的あり方を目ざした橘だが、この共同の意味を、共同耕作 etc. まですすめようとしな。最終的な形として説くのは、家族的独立小農法¹⁹⁾の経営形態であり、共同の意味は、購入、販売を出ない。なぜか。はっきりいえることは、橘は、家族或いは極く親しいものの以外を含んで、新しい共同体を作るという志向がないということである。コンミュニの共同体などの壮大なものは、そもそも構想しなかったのである。後、5・15事件の青年将校たちから、橘からは農村疲弊の事実を学んだだけだ、といわれ、思想そのものはあまり問題にされなかった²⁰⁾所

いもその辺りにあろう。

ここで一つ思い起こしてもらいたい。橘は『農村学』等で、米と繭を国民経済の二本柱とすること、即ち農業を中心とする日本を構想していた。しかるに、その構想は、それ以上肉付けもされなかった。徹底したアウトアルキーのユートピアとしては農村を描かなかったのである²¹⁾。だから協同組合運動も、その次に何が来るかの構想は、それを担った会員たちそれぞれに任されたのである。

次に、教育、啓蒙活動の内実を見なければならない。活動の形態としてあげられているのは、一般の運動がもっているのと同じく、橘の講演と雑誌発刊、そして後で作られる愛郷塾である。愛郷塾の方は次章でのべる。

まず橘の講演をみると、具体的な救済策を説いたものが非常に少ないのに気づく。「失業問題と農村」の題では、「(明治以来——引用者)日本もやたらに資本主義的物質文明に心酔して来た結果(中略)その病的の最も甚しい状態」²²⁾にある、「失業問題を解決せんと欲するならば農村を先づ救はなくてはならない」²³⁾と、「土に還れ!」以上は出ない。

その他、イギリスでの闘いこみを紹介してその破産性を説いたり、マルクス主義批判と称して、農業には賃労働—資本関係は適用できないとか、学を好むという風な講演が多い。そして、協同組合を説くときも、具体的な話にまではいかない。

このような舌足らずな、そして文章で読む限りは稚拙とも思える橘の話が、若者をとらえたのだろうか。だが、後に5・15事件の被告となった愛郷会員たちは、その訊問調査で、一様に、講演内容に共鳴して入会したといっている。なぜか。これは、受け手の側を問題にせねばならない。彼らは新しい農村を求めていた。それは、農村文明の希求という形であったし、食べていけない生活の改善であったし、旺盛な知識欲であった²⁴⁾。そして橘は、すべてに対して完全には答えていないが、新しい答えだと思えた。橘の都市=資本主義への戦闘性は強烈であった。それは、農業社会で生きていく意味を与えてくれた。彼らは極めて空腹であり、橘は美味ではないが、ビフテキであったのである。

更に次のようなこともいえる。当時、農村の改革を目的とする多くの雑誌が出された。そのうち私の知るだけでも、国民高等学校の「弥栄」、瑞穂精舎の「百姓」、農本連盟の「農本社会」、協働村落文化研究会の「協働村落」がある。そのうちで愛郷会の「農村研究」は、澆刺としている点では群を抜いている。支部が爆発的にふえていくことを報じ、農民文芸を起こそうと意気込み、痛烈な政治批判をし……。愛郷会は青年を啓蒙するだけでなく、逆に、青年達に活動の場を与えるという意味ももっていたのである。

次に雑誌による教育・啓蒙の内実をみる。「農村研究」は啓蒙的役割ももっていた。1931年2月の「農村研究」に「へその存在理由」という詩がある。

「おい兄弟、君はかつて君のへそが何故存在するかを考へて見た事があるか? へそは親ゆづりだ、生れ乍らについてゐる だからへその存在理由を考へない。

では兄弟君は、君の血と汗のすべてを 奪ひ去る小作料、肥料金、税金、利子は 何のために納めるのか、考へて見た事があるか?

これも又親ゆづりとでも云ふのか! (中略)

兄弟よめをさせ!! お前のへその存在理由を考へて見よ! 明日の世界は俺達のものだ」²⁵⁾

これは、まさに初期の愛郷会のあり方をあらわしている。農民は未だ眠っている、いや眠らされている²⁶⁾、我々がこんなに苦しめられる原因を考えよ、そうすると都会が、資本主義が敵だとわかるだろう、それを打ち破るために、まず土に還って団結しろ、である。先程も述べたように、この「土に還れ」運動は、その後どうするかという点は、支部により多様でありながら²⁷⁾、愛郷会の組織の方は拡大していったのである。

雑誌の教育的意図は、農業経営法や栽培法の改善においてもみられる。例えば前者は、「肥料金退治法」²⁸⁾、後者は「副業としての草花栽培」²⁹⁾である。

だが、愛郷会は、会の活動自体が会員にとって、村民にとって、一つの教育活動であると認識していた。例えば、農業経営に関する改革が、それに携わった会員を変える実地教育であり、またその波及を引き起こすという意味である。だから肥料の協同購入にしても、協同運動一般の成功を保証するものと総括される。

「今回の肥料配給によって得た収穫は断じて、肥料商から買ふより安い肥料が買へたといふ、そんな小さなことではなかった。それは従来最も困難とされてゐた農村の（殊に茨城県）協同運動は、中心人物が私心を捨てて全く農民大衆の利益増進を第一義に考へて行ふならば必ず成功するといふ事をハッキリと掴むことが出来た。

更に従来の実業教育殊に農村教育が、実習とは名のみで知識にのみ偏重して教育を行つてゐたが、今回愛郷塾生が肥料配給に於いて行つて^(??)実習こそは百の室内授業に優るものであったと同時に、これは将来の教育に新しい光を投げ与へるものであった」³⁰⁾

以上のような役割から、愛郷会自体が一つの教化機関として意識されていたといえる。

最後に、愛郷会が意図した農村文明の創造を考察する。いったい、当時の農本主義思想は、ほとんど、都会文化・文明の類発と、それに代わるべき農村文明建設を説いている。それは、「左」「右」を問わない観がある。初期の日本農民組合もそうだし³¹⁾、アナキスト団体農村青年社³²⁾もそうである。これは、単なる小作一地主関係だけではなく、農業、農村自体が破壊されつつあるという考えに対応しているといえる。それは、小作争議一本槍になっていった日本農民組合では、農村文明云々は、もはや語られないことからわかる。

だが、農村文明として語られた内実は何か、と問うとき、それはかなり曖昧である。今回は、愛郷会員の農村文明観をみることで、次へのステップとする。

農村文明について論じる「農村研究」には、二派ある。ひとつは、都会文明を糾弾し、その「浸潤」から「荒みゆく村を守る」³³⁾であり、他は、文字通り農民文明の創造である。

この二者はどう違うか。前者は、今まで農村に「美風」があったが、それを都会が破壊した、或いはしつつあるとする。

「農民には農民独特の享楽がある。これを私は生産的の享楽といひ、また生活的の享楽といふ。(中略) 祭礼といひ、播種或は収穫祝といひ、その他の冠婚葬祭といひ、それは単なる個人的の享楽ではなくして、神々ともなる、また隣人との共同の享楽である。この共同の享楽である所に、農民の享楽の独自性があり、また決して否定されてはならない根拠がある。(中略) しかし現代農村の娯楽や享楽の傾向を見る時、農民或は農村特有の享楽が徐々に失はれて、都会的の経済、都会的政治、更に都会的教育と共に必然的に都会的の享楽が次第に農村に浸潤してくることを我等は認識しないであらうか？」³⁴⁾（傍点は原典）

「美風」を都会が破壊したと認識する以上、都会文明を＜俗悪＞と描かざるをえない。＜俗悪＞な都会文明と、＜健全＞な農村文明というわけである。だから、文明論は、極めて優等生的、道学的とならざるをえない。そして方針としても、心構えを正して、都会文明にだまされるな、ということになってしまう。

この農村の「美風」保護派は、愛郷会のもつ一つの傾向に対応している。橘自身も次のようにもらす。

「冬休みの楽しい日を田舎のおじい様のもとで暮した時分の記憶がまざまざと浮び上って来る。(中略) どうだ諸君この田園の一情景、あかくあたたかきえろりのたき火を囲んで語りきかせる白髪のおきなのふし(3字不明)昔々のお伽噺、それに我を忘れてきき入るばら色の顔のおきな児」³⁵⁾

百姓はしいたげられた歴史をもつという橘だが、他方、昔は人間関係も豊かで、という。農村文明の提唱は、失われたものへの愛惜にたしかに支えられているのである。

もう一つは、農村文明を未来に求める論である。

「吾等の愛郷主義農民文学は単なる郷土讃美や農民生活の讃美や或は退嬰の咏嘆に止まらずして、ブルジョア文学はもとより、プロレタリア文学より一步も二歩も否、更らに五十歩も百歩もかけはなれたところの新しい真に農民的なるものであり、農民大衆それ自身を指導啓蒙する農民文学であらねばならない」

その理由として、庄司力之介は、「プロレタリア大衆の持つ文学までブルジョアのインテリ階級の人間によって製作され論議され支持される」³⁶⁾ から欺瞞だ、また現在の農民文学も同様である、我々こそが真の農民文学を創造すべきだとする。

この主張も、実は橘の思想に対応している。マルクス主義を批判する橘の口ぐせは、「ブルをたたきふせ、プロをふみこゑて」³⁷⁾ そして「世界の何処をたづねても百姓らしい百姓は見付からない。だからしてまたほとんどの人類社会が見付からないのだ。ならどうすりゃいいんだ。おえら百姓がおえら百姓の世界を創り出さなくちゃだめなんだ」³⁸⁾ である。農民社会の創造は、未踏の仕事とされている。

さて、新農民文学の使命として、次のような政治的任務が付される。

「農民大衆の愛郷主義的イデオロギーの涵養に力め、社会批判力を旺盛ならしめ、もって本来社会(農民本位、農村本位の社会)への確固たる見通しがつくやうに、農民意識の即愛郷主義的農民意識の向上を図るべきことであり、(中略)現代社会の経済組織の批判、其他改造されねばならないすべての、非農民的な、非農村的な、背農的なものの徹底的批判をなし、而うして明るき自由な、絶対に搾取なき、階級支配なき世界全人類の平等なる社会の建設、其先決問題として経済組織の改造即農民本位の経済組織の確立と農民本位の社会の実現をもって究極目的とする」³⁹⁾

随分威勢はいいが、要するに社会主義リアリズムの農村版であり、従ってかどうか、「農村研究」で見限る限り、アジテーションのような詩しか生み出していない。農民を、農村を歌おうとしたが、新しい方法は生み出しえなかったのである。懐古派も、創設派も共に、文化的新しさはもちえなかったのである。

愛郷会は確かに優等生的側面をもっていた。農村救済は、村の中に混乱を持ち込むわけでもない。逆に、農業経営の改善、協同購入は、元来行政の側も奨励していたものだ。だから、この愛

郷会の運動に対して、県の役人も講習会で講演したり、個人的に援助したりしている。いやむしろ、協同購入などは、県の助力がなければ実現しなかったのである⁴⁰⁾。

だが愛郷会は変質していく。まず農業経営法を蹴とばす⁴¹⁾、次いで動労主義を否定する⁴²⁾。そして政治的進出をときだす。だが、この政治への傾斜自体は、橘の独走ではない。会員の急進的部分は、既に政治的改変がなければ農村は救われないと認識していたのである。

1932年1月10日、愛郷会は幹部会を開き、政治的進出の是非を問う。橘は次のようにいう。

「政治は最後の決戦である。此際我等は一人でも政治運動に突進せねばならぬ。この国運転回期に当って、農民のために政党が一つもない我々は最後の決意をして起つべきだ」⁴³⁾

そこで、「賛否、両論、続出し（中略）結局この際断然、政治的進出を断行することに決し」と『農村研究』は報告する。まず、農民党の結成という形で、政治運動が開始されたのである。そして橘は、既に発起人となっていた日本村治派同盟⁴⁴⁾の活動に、杉浦孝らは「農本社会党」の結成にと向かう。これらは共に合法的活動である。

そもそも愛郷会は、その名前からも、標榜する兄弟主義からも、そして多分、日本農民組合等への反撥からも、合法的色彩を強くもっている。だから、極めて切迫した表現で、「事ここに至って今更、農業経営の改善でもあるまい。道は社会大改造の一路あるのみ。一切の経済制度、社会組織、政治型態を農民本位に樹て直さねば農民は永久に下敷だ」⁴⁵⁾と語っても、会員には（当人に非合法の意図があるかは知らず）合法的活動の意味でしか受け取られない。例えば、愛郷塾生宮本幸雄は検察の訊問で「四月二十一日（1932年のこと——引用者）（中略）橘先生に会ひました。先生は（中略）此の際農民として一つの運動を起さなければならぬ（中略）君等も覚悟をして居なくては行けないと云はれました。私は多分請願運動か愛郷塾の拡大運動の事だろうと思ひました」⁴⁶⁾ といっている。

『農村研究』にあらわれる愛郷会の政治意識はわりと鮮明である。それは、「ガンヂーズム」⁴⁷⁾であり、内政（＝農村救済）重視の見地から、軍拡に反対したり、軍部がおこす対中国戦争を批判したりする。

「このこと（満州事件の日本にとっての有利な展開——引用者）は勢ひ日本資本主義を再高揚せずには置かぬ。（中略）資本主義のより高き飛躍は必然的により深刻なる農村及一般無産者への一大恐慌を予約するものである」⁴⁸⁾

「前者（日支の動乱——引用者）は非道徳的な武力主義の友喰ひによる破滅」⁴⁹⁾

これはいかにも愛郷会らしい、愛国より愛郷をである。

だが、橘自身は、愛郷塾を設立する1931年4月頃には、青年将校や井上日召らの影響をうけ、非合法直接行動を視野に入れている。その年の10月事件に加わる準備までしていたのである⁵⁰⁾。橘は、それまでの愛郷会の運動では、もはや農村を救えないと確信していた。

愛郷塾は、以前から教育機関として構想されていたが、このような情勢の中で政治にまきこまれる運命をもって設立されたのである。

3. 愛郷塾

(1) 教育内容

運動体愛郷会は、教育機関として愛郷塾を作る。1931年4月のことである。これは、従来、現

在の教育を目隠しとして批判し、農村の改造は、自覚した青年によるといつてきた橘、愛郷会にとって、「青年の模範、農村の指導者」⁵¹⁾となるような核たる青年育成として当然の道だった。この「青年の模範、農村の指導者」という考えは、県の有力者も同一であり、代議士風見章らも結成を援助した。

さて、愛郷塾の内容を「愛郷塾のあらまし」⁵²⁾に従ってみていく。

「愛郷塾を立てやうと思ひ始めたのは昔の事だ。しかし私は大きな廻り道を辿らねばならなかった。といふのは外でもない。土の勤労生活者として農民生活に徹底しやうなぞといふ健気な志を抱く者は謂はば脱線党としてのけ物にされるにきまつておる。(中略) 百姓になるのはその(出世のこと——引用者) 正反対で取りもなほさず人生の落伍者である。それなのに私はその人の落伍者になれと教へやうとしておるのなもの、誰だって高い金を払ってそんな教育など受けやうとはしないにきまつてる」

橘は揶揄気味に、農業を、出世から取り除かれた職業として位置付ける。そこから、自営できねば成り立たないからと、乳牛飼育が軌道にのった段階で開塾したというのである。

愛郷塾を起こした理由は次のようにいわれる。

「現状はどうだ。農を忘れ去りたる事実に於て全日本は勿論その日本の農村それ自身の如く甚しきものが何処に見出さるや。然らば此最も悲しくも憂ふべき現状を救ふに何を以てすべきであるか。(中略) 先最初に造らざる可からざるものは真に農民の名に値する真農民即ち土の勤労生活者に外ならないのである。かくて自営的農村勤労学校愛郷塾を私は起きなくてはならなかったのである」

愛郷塾の教育内容とはどのようなものであったか。塾は少年部と青年部に分かれる。少年部は高小卒程度で2年半、青年部は18歳以上で、これを甲種、乙種に分け、甲種は、長期、乙種は短期(2～6カ月の任意)である。

少年部と青年部はその目的、内容を異にする。共に学課と実地を課すが、少年部の学課は、「真農民の養成に眼目するものである以上、農民として必須欠く可からざるものと解せられるものを即実生活的に教へんとしておる」ので、珠算、博物、簿記、製図、農業経営学、農学大意、歴史他である。実地は、栽培、畜産、経営、簡単な建築、販売である。

青年部は目的を「愛郷道精神を奉じ農村開発、農本日本再建の斗士たらんとする」ので、学課は、橘の農村学の他に、経済学説史、産業組合論、社会学入門、心理学入門、哲学入門等であり、実地は、自らの計画による農場経営、協同運動、農産物加工業等とされる。その他、少年部青年部共、武道、芸術が随意とされる。

費用は、少年部及び乙種青年部は、一カ月米1斗5升、金5円、甲種青年部は自給である。生活の時間割は、5時乃至5時半起床、午前中は3時間の学課、午後1時間半程実地、その他の時間は、炊事、畜舎当番などと食事ではぼ埋っている。また、夜間は自習と武道等、土曜には、弁論会、茶話会等を催し、少年部は中学校並の休暇がある。旅行も行なうとなっている。

愛郷塾とは何かを問うには、同時代に流行した塾風教育機関である日本国民高等学校と比較すると、それが鮮明になる。それは次節で試みるので、ここでは、愛郷塾に特徴的なことを考察しておきたい。

まず、どのような青年を作りだそうとしたか、ということである。今みたように、少年部と青

年部とでは、目的を異にしている。青年部は明確である。今までの公教育——それは、農村が抑圧されている現状を自然なものとする反農民的な教育である——に叛旗をひるがえし、農村変革の担い手を作り出そうとする。だから、学課は農村の現状とその改革案を知らしめるものだし、実地は都会の抑圧をはねのけるための訓練をする。

少年部は、青年部の理念とは大きく異なる。少年故にイデオロギー性を排したのだろうか、農業に役立つ学科と、橘流農法の実習である。先にあげた日程をみて気付くのは、決して楽なスケジュールではないということである。＜修養＞の側面を強くもっている。いったい日本では、農民を対象とする塾は、私の知る限りでは、実習を重んじ、修養を求めた。デンマークの例をみればわかるように⁵³⁾、これらは本来、農業教育にとって不可欠というわけではない。なぜ、日本の場合こうなったのか。その理由は、農民はただ働けとはいわず、農民に社会的覚醒を求めた愛郷塾でさえも、勤労と修養を重視していることから或る程度推察される。

それは一つには、勤労自体を喜ぶ（或いは喜ぶことを尊いと思う）心性が抜きがたいのである。橘らは勤労というとき、決してそれが現状を突破するとは思っていない。それを強調するのは、それで解決するという考えにつながる犯罪性をもつことを知っている。しかし、勤労それ自体の評価こそ、農業の根幹と思っているのである。二つには、困難性を自覚せよということである。特に農業の場合、農業にかけられる攻勢を、経営的にも思想的にもはねのける、そのための強固さをもてというわけである。橘らにとって、農業の危機がそれだけきびしく考えられていたのである。

塾生の入塾動機は何か。塾生は二つに分かれ、一つは元々橘の手足となっていた愛郷会員、もう一つは新入塾生だが、後者の入塾の動機は、農業に従事するには鍛えられた方がよいとするのが半分程いる⁵⁴⁾。また愛郷会員の場合と同じく、知識欲をもった動機が多い。

橘は、農村改造には中央への政治的テロしかない、5・15事件への参加を決意する。彼は、1936年秋から、或いは1937年3月頃から愛郷塾生青年部員に対して参加を打診する。彼らはほとんどが、そのまま橘に従ったのである。

(2) 国民高等学校との比較

愛郷塾は、農民を対象とした塾風教育機関として、加藤完治らの国民高等学校（以下、国高と略す）と近似したものとみられていた。それは前節で述べた愛郷塾のうけとられ方や、協調会の『農村に於ける塾風教育』での扱いからみてとれる。

たしかに、大雑肥にあって、農村での中堅青年の育成を目ざしたという点や、実習のウェイトが大きい等の共通点はあるが、国高が終始国策的であった点からも、別なものとして位置付けられねばならない。ここでは、愛郷塾の位置を明らかにするために、国高と比較することとする。

では、国高とは何であったか。世上传えられるところでは、デンマークが国民高等学校方式による農民教育に力を入れ、戦敗での疲弊から立ち直った例に学ばんとし、農村の動揺が顕在化してきた1915年（大正4年）山形県は、加藤完治を迎えて、山形県自治講習所として発足させたのに始まる。そしてその後、1927年加藤が茨城に日本国民高等学校を創設し、全国にその影響を受けた国高が多数作られたのである。

以下この国高の教育方針を、加藤の著作、『日本農村教育』その他で概観するが、その前に大正から昭和10年過ぎまで日本農村のモデルとされたデンマークの農民教育を紹介する。

デンマークは1864年の対独奥戦に破れ、国は疲弊した。その中でグルンドウィッチは国民高等

学校の構想を明らかにし、教育の普及を唱えた。それをコルが実現した。この国高は公教育をうけた後農業に従事した、20歳前後の青年を再教育せんとするものである。

ここでの教育は、農学校と異なり、農業技術の修得は意図されない。歴史、国語、数学等の普通教育の科目が教えられる。だが、既設の普通一公教育機関たるラテン学校のあり方を批判する。ラテン学校は、『『確かなるパン』の途』⁵⁵⁾を求めるためのものであるので、試験という強制力により存続し、従って上っ面の理解と暗記に終わっているという。

これに対して国高は、求める人間像をもっている。それは「如何なる問題が起っても、正確に解決の出来る強くして動かすべからざる理性」⁵⁶⁾をもつ人間である。このため学校生活は「学校は何等取締規則を設けず何等監督を行はぬが少しも生徒に咎むべき行為ある事無く、又生徒は講義に出る事を強制され又は試験に依て其学力を試みらるる事は無い」⁵⁷⁾というように生徒の自主性に任される。学科も歴史教育を中心とし、それも知識ではなく、「歴史発展の主なる径路、連絡を」⁵⁸⁾教師の「生きた言葉」で講じる。教室外でも、教師と生徒の接触の機会が多くもたれ、生徒は夕食後、教師宅を訪れもする⁵⁹⁾。このようにして、決して農民に止まらない、国民養成が意図されたのである。

デンマークの復興は、この教育の力がもとになってなされたとされる。19世紀の末頃から、このデンマーク教育が諸外国に紹介される。日本では、1913年（大正2年）イギリス人ハガードの著書を『丁抹の田園生活』として、内務省地方局が出版し、ついでその後、那須皓がドイツ人ホルマンの『国民高等学校と農民文明』を翻訳した。そして、大正年間にまずデンマークブームが登場した。

前述の加藤は、このデンマークの国高を日本化せんとしたという。だが加藤の作った国高は、デンマークのそれとは、かなりの違いをみせる。加藤はここからまず、重要なのは技術ではなく精神であると引き出す。しかしこれは、農業を尊び、困難に負けない不屈の精神という意味である。このように、農業に身を捧げるという精神の涵養を主眼にするため、その教育内容も大きな相違をみせる。学科で最重視されるのは、加藤がうけもつ「農村経営」である。これは、加藤が「これこそは日本民族の理想信仰なりと信ずるところを、自分の体験に照らして生徒に話をす」⁶⁰⁾ことといわれる。

いったい加藤には、煩悶の中で生死の境を体験し、そこから生の礎たる農業の意義をさとしたという体験があり、またその後寛克彦の説く「神ながらの道」に心酔し、ここから「日本農民魂の鍛錬陶冶」を「日本農村教育」⁶¹⁾（ルビは原典）の目標としている。従って「農村経営」での精神講話もこの種のものとなるのである。

特徴的なのは実習が中心におかれることである。この実習も実際に役立つものというより、精神鍛錬の方にウェイトがおかれている。困難な開墾、打起こしで精神を鍛えるのである。加藤の精神鍛錬策は徹底していて、寛克彦考案の日本体操採用（デンマーク体操は、健康維持のため）や、武道（剣道、直心影流）の稽古などもそのためである。そして、禊、神社参拝も重視される。

このようなきつい国高に生徒たちが耐ええ、全国的に隆盛したのはなぜか。理由は三つ考へうる。一つは、入学希望者に学校を知らしめるため、1カ月間労働ばかりやらせて、それでもという人だけ入学させること。二つは、加藤及び職員の卒先を旨とした教育方針である。農業実習を共にし、人のいやがる人糞も卒先して扱って手本を示すというやり方である。このように、人を

圧倒せしめるものをもつと共に、生徒に気を配った叱り方や激励をしている。この辺りに、後々までも加藤を慕う青年が出た理由がある⁶²⁾。

三つ目には、生徒の側が、国高に求めたものがあったということである。国高では、長男と次男以下を分け、長男には、村に止まり農業に従事する、次男以下は、海外移民を目ざすというものであった。海外移民志望は、このままでは食べていけないという事情があるのは当然だが、それに加えて（長男の場合も）、修養生活の中の＜農＞に精神的拠り処を求めたといえる。

今までみてきたように、国高と愛郷塾は、農民を対象とすること、塾形式であることから来る共通点はあるが、基本的には異質である。それは、国高が国策を担って、農村の中堅を作る、或いは朝鮮、満州移民を養成するのであったのに対し、愛郷塾は、そこに吸収される部分をもちながらも⁶³⁾、体制否定の意志をもったからである。両者では「農村改造」の内実が異なっていたのである。学課や実習形態の違いもそこから出てくる。公教育への批判の視点もそうである。

国高も公教育を否定する。しかしそれは、今までの農村での教育が、都会に憧れたり、農業にうちこまない人間を作る故であった⁶⁴⁾。これに対して愛郷塾は、国高と共有する主張に加えて、現在の教育の愚民策を告発する。そして、都会に負けない人間作りのため、虚偽でない知識を求める。公教育の情動的否定ではなく、知識では圧倒的に優勢な中高等公教育へは、利用主義で対峙する⁶⁵⁾。農村改造のためには、世界認識の正しさが必要だからである。

国高、愛郷塾に共通な限界は、校長、塾首の圧倒的な個人的影響をつき破るのがみられなかったことである。愛郷会支部としては、橘からの独立性をもっていたが、5・15事件参加にみられるように、愛郷塾となると全く橘のままである。塾となることによって、自己教育の方向性をあらかた失い、閉鎖性をもってしまったのである。

最後に、愛郷会、愛郷塾をざっと総括する。愛郷会は、農民を啓蒙する意図をもつと共に、農村改変のためのゆるやかな運動体でもあった。そこでは、優等生的性格や、急進的性格がうずまいていた。愛郷塾はその内部からおこった。故に中堅農民の＜修養＞、知識の場として期待される側面ももっていた。だが、発足時には、主導は、既に政治運動に傾いていた。そして直ちに直接行動へ向かった。だから、愛郷会時代にあった文化的急進性の方は、開花の場を与えられず、政治的志士の集団として終ったのである。

愛郷会、愛郷塾自体は、テロ行動に走ったという意味で、他の農村青年団体とは際立って見える。だが、愛郷会、愛郷塾が示した前述の性格——いわば期待されたものとしての優等生的な対応と、現実の疲弊を看過できない急進性との複合された様——は、当時の農村青年の現状変革への意向のあり方ある程度代表していたのである。

註

- 1) 『日本近代教育百年史 社会教育(1)』1194頁 小川利夫執筆
- 2) 代表橘孝三郎が塾生と共に5・15事件に参加した。
- 3) 「真面目に生き様とする心」『一高校友会雑誌』1914年1月号
- 4) 「アクティフィスト」『同上』6月号
- 5) 「同類意識的精神性」『同上』11月号
- 6) 「愛と誠」『同上』2月号
- 7) 「精神的個人主義」『同上』1915年2月号

- 8) 『土の日本』、『農村を語る』、『農村学』等による。
- 9) これは加藤完治らの主張である。
- 10) 1964年9月10日 松沢哲成氏への談話
- 11) 「常陸の新しき村に若き婦農の哲人を訪ふ」
- 12) 13) 「同上」
- 14) 『(と)第1424号爆発物取締罰則違反殺人及殺人未遂〔被告人橘孝三郎外19名〕』(民間側検事聴取書)——以下『1424号』と略す——294頁等。
- 15) 武者小路実篤『新しき村に就ての感想』のうち、「理想的社会」等
- 16) 小学校の教師や、自作農の青年が多かった。
- 17) 18) 『農村研究』1931年8月「愛郷会のすすめ」
- 19) 酪農をとり入れて家族単位で経営していく形態
- 20) ここに、5・15事件における権藤成卿との違いがある。拙論「権藤成卿の社稷自治論と『昭和維新』運動における影響」(池田進・本山幸彦編『大正の教育』所収)参照。
- 21) アナキスト団体である農村青年社は、農村を徹底した自給自足にしようとする。添田晋「農民に訴ふ」(『農村青年社』資料)
- 22) 『農村を語る』5頁
- 23) 『同上』21頁
- 24) 愛郷会に入る前の模索の時代には、「戦旗」やマルクスを読んだりする青年もいた。『1424号』(被告人訊問調書)参照。
- 25) 和雲生作
- 26) 庄司力之介は「現代教育と農民」(『農村研究』1931年4月)で教育の欺瞞性を指摘する。会では、現代教育を目隠し教育とする考えが一般的である。
- 27) 協同購入、農民文芸運動、奉仕の事業等である。
- 28) 橘徳次郎執筆『農村研究』1931年1月、3月
- 29) 林正五執筆『同上』1931年1月
- 30) 『同上』1931年11月「肥料共同購入状況」
- 31) 綱領の一つに次の文がある。「我等農民は知識を養ひ 技術を研ぎ徳性を涵養し 農村生活を享樂し農村文化の完成を期す」復刻版『土地と自由』38頁
- 32) 例えば、鈴木曄之の「如何に為すべきか」(『農村青年社』資料)では、文化運動について「ブルジョア文化の否定 万人の享樂生活確立! 宗教否定(神社、仏閣の排斥、公会所化) 新文化施設の確立(芸術、科学、一切の文化)」といわれる。
- 33) 『農村研究』1931年1月「文芸欄開設のこぼし」
- 34) 『同上』5月 山川時郎「農村の都会化」
- 35) 『同上』1月「農村崩壊の原因と救済(-)」
- 36) 『同上』5月「愛郷主義農民文学建設の提唱」
- 37) 『同上』2月「巻頭言」
- 38) 『同上』3月「巻頭言」
- 39) 『同上』5月「愛郷主義農民文学建設の提唱」
- 40) 『農村研究』1932年1月の「果然!共同購入の大成功」によると、県の鈴木農林主事が県購連にかけあっている。
- 41) 『同上書』1931年6月「編輯後記」
- 42) 『同上』同年12月「未曾有の農村不況に直面して吾々農民の進むべき道」
- 43) 『同上』1932年2月「第一回幹部会」
- 44) 綱領は、イ. 農業を本として経済組織を改革する。ロ. 自治村落を単位として連合組織を構成する。ハ. 村塾を立てて農本文化建設の基礎とする。
- 45) 『農村研究』1931年11月「編輯後記」
- 46) 『1424号』(民間側検事聴取書)109頁。原文は片仮名で句読点なし。
- 47) 『農村研究』1931年8月「断想」渡辺重雄

福井：橘孝三郎と愛郷会・愛郷塾の農民教育

- 48) 『同上』1932年3月「一農民の頭脳に映じたる憲政行進曲」大貫明幹
- 49) 『同上』1931年12月「編輯後記」
- 50) 『1424号』（被告人検事聴取書）後藤国彦140～141頁
- 51) 『1424号』（温水秀則）5頁
- 52) 『農村研究』1932年3月
- 53) 次節参照
- 54) 『1424号』によると、小室力也の兄は、愛郷塾を「国民高等学校の様な処」といつている。（被告人検察調書）491頁。また橘は、「此処は（中略）修養をする為めの処だから其為めには仕う云ふことをするかも知れない。君を殴るかも知れない」（『同上』同492頁）といっている。
- 55) ホルマン『国民高等学校と農民文明』57頁
- 56) フォート『丁抹の農村と其の教育』252頁
- 57) 『国民高等学校と農民文明』170～171頁
- 58) 『同上書』220頁
- 59) 宇都宮秀夫『丁抹から何を学ぶ』196頁
- 60) 『加藤先生 人・思想・信仰』（上）263頁
- 61) 『日本農村教育』（全集版）4頁
- 62) 『加藤完治先生逸話集』参照
- 63) 5・15事件後も愛郷会の方は存続し、後に農村の「優秀」な中堅青年となった人も多い。
- 64) 公教育が、現実にすぐ対応できるという方がおかしいのだが、これは当時の一般的風潮であった。
- 65) 林正三は自分の息子に、兄弟主義精神を忘れずに中学へ行き、その知識（学問的な）を農村のために生かせといっている。『林正三獄中通信』316～323頁。

（本学部助手）